

抄録参考例

タイトル

顔に対する無意識的な価値表象に関わる神経基盤

発表者

伊藤文人¹⁾, 川崎伊織²⁾

所属機関

1) 東北福祉大学感性福祉研究所, 2) 東北大学大学院医学系研究科高次機能障害学分野

研究概要

「背景と目的」

腹内側前頭前野 (vmPFC) や側坐核 (NAcc) は、刺激の価値判断に無関係な課題を行っている際や刺激をただ見ている際に、自動的にその価値を表象することが明らかにされている。しかしながら、刺激を意識的に認知できない場合でも、これらの領域が刺激の価値表象を行うかどうかは明らかにされていない。そこで本研究では、これらの領域の活動が刺激を意識的に認知できない場合と刺激を意識的に認知できる場合でどのように異なるか検討した。

「方法」

本研究には健常成人 28 名 (女性 14 名, 平均年齢 21.6 歳) が参加した。fMRI 撮像中、顔写真が 34 ms もしくは 2000 ms の時間でランダムに呈示され、参加者はただそれらを見るように教示された。顔写真の前後にはマスク刺激が呈示された。fMRI 撮像後、参加者は撮像中に呈示された写真のうち 2 名の顔を同時に呈示され、選好判断を行った。vmPFC と NAcc に解剖学的な region of interest を設定し、信号変化率を取得した後、刺激の呈示時間 (34 ms・2000 ms) と選好判断の結果 (好き・好きではない) を要因として 2 要因の分散分析を行った。

「結果」

その結果、NAcc では選好の有意な主効果のみが認められ、刺激の呈示時間に関係なく、好きな顔に対する活動が、そうではない方の顔に対する活動よりも有意に高いことが明らかとなった。一方、vmPFC においては、選好と刺激の呈示

抄録参考例

時間の主効果の有意傾向と交互作用の有意傾向が認められたため、下位検定を行った。その結果、刺激の呈示時間が 2000 ms の場合のみ、好きな顔に対する活動が、好きではない顔に対する活動よりも有意に高いことが明らかとなった。次に、NAcc と vmPFC の活動について実験条件ごとに相関解析を行ったところ、刺激の呈示時間が 2000 ms の場合にのみ有意な領域間の相関が認められた。

「考察」

これらの結果は、無意識的な顔の価値表象に関わる神経基盤が存在し、意識的な価値表象に関わる神経基盤と異なっている可能性を示唆している。